

世田谷村日記

石山修武

八月八日

朝歯医者へ。風はあるが直射日光はきつい。昼大学へ。遂に新宿から大学までバスに乗ってしまった。残念である。日左連池本会長来室。野田さん鈴木夫妻来室。

研究室ゼミOB宮本君来室。学生達続々と来室。進路相談の連続。私はこういう類いの相談を学生時代も誰かにした記憶がないので、学生達に本当に役に立っているのか解らない。卒論ゼミ、ロバ達の沈黙。明らかに学生はロバになっているねコレワ。たしなめる気力も失せて指導はD野村悦子にバトンタッチする。卒論はもう野村に任せたい。世田谷村日記を自分で読み返してみると呆然とする。ああしたい、こうしなくてはならぬの連続で何一つ実現できていない。世田谷村日記の充実から手始めに自己改革をしなくては、なんて書いてあるのを読むと、思わずコンピュータのスクリーンをブチ壊したくなるね。自己嫌悪で。夜若松氏と食事。

八月九日

設計製図採点。私が教師になってから最悪の結果となる。もともと建築に向いていない人間が無理矢理建築学科に侵入しているとしたか思えない。落第者続出する。夕方古谷誠章邸へ。食事に招待されお宅拝見となる。都心の広い土地に小さな林まで残した中の住宅だった。清家清自邸を思い出した。イタリア型の享樂では

ないが生活をとにかく楽しみたいとする意欲が横溢している。

二〇時過世田谷地下の連中といっても二名迎えに来て、東名高速を幻庵へ。榎本基純幻庵主には又もわがまをきいていただいた。夜半遅く突然電話して今夜泊まりますはないだろう我ながら。松本安藤幻庵泊。

八月十日

幻庵を去り名古屋浜島さんの家へ。猛暑の中、実測。冷たいお茶を何杯飲んでも汗が吹き出る。仕事は予想以上にはかどり十七時過修了。再び幻庵に戻る。ぜいたくな日になった。

幻庵では榎本さん二男と久し振りに再会。良い時間を過すことができた。

八月十一日 日曜日

というわけで今、幻庵でこのメモを記録している。一昨昨日の事がもう思い出せない。早朝ドシンと地震が来た。この二日は私の意図的方法による弟子教育でもあった。どうやら教える極意は言葉を使わぬ事だ。松本安藤には幻庵を体験させたいと考えていたので。彼等には設計家としての出発時に小さくはあるが水準との出会いを記憶させたいと考えたのだ。感動できるきっかけとその水準は人生の質を決めてしまう。私にとって久し振りの幻庵は良いエネルギー補給になった。幻庵主榎本さんは左手をケガしていたが相変わらず、自分のペース、自分のリズムで生きているようで、うらやましい。

処女作は作家の一生を暗示すると言われるが、私はこの処女作の基本的性格であった際限のない自由という混沌へ今でも降下し続けている気配がある。身体が衰えていっても、物質はその速度

程には衰退しない。幻庵は錆びながら、どうやら時間と共に在るのだが、私も榎本さんも、双方共に痛手をおって哀切な感があるような気もするが、八タ目にはどうか。当事者同士、建築家と依頼者にしか解らぬ事もあるのだ。夕方東京帰着。

八月十二日

昨夜は風呂にも入らず寝た。九時四〇分お茶の水駅待ち合わせ。気仙沼の高橋兄弟と千葉のステンレス工場へ。聖徳寺の墓製作はいよいよ大づめである。東京駅精養軒でハヤシライスを食べて兄弟とは別れる。十五時過の新幹線で熱海へ。伊東線に乗り換えて蓮台寺へ向っている。渡り職人だね建築家は。来月、来年のこと等まったく解らない。予想も出来ない。

眠くて仕方ないから体は疲れているのだろう。

海が輝いて視えている。大島の頂きはすっぱり雲に包まれて動かない。若い時はこんな風景だけで気が晴れていたものだが、今は仲々そうはいかない。十七時半蓮台寺。ハンマが迎えに出てくれて、車で安良里へ。安良里港のハンマのアパートで少し計り打合わせ。食事はハンマ宅近くのレストラン。ハンマ鈴木敏文森秀己小林の伊豆少年団のフルメンバーがそろって食事。お互いに少々年をとったが相変わらずの昔の少年風の面影は変わらずに、安心できる友人達である。今夜から明日にかけて原稿二本書かねばならぬので酒は飲まずに過ごした。段々こういう淡々とした附合いに移していかねばならないのだろう。しかしながら結局原稿一枚も書かず。ピンチである。ハンマ宅泊り。

八月十三日

七時前目覚める。よく眠った。何処でも良く眠れるのだけがと

り柄だ。ハンマのアパートの窓から伊豆の山が見えている。山の斜面の墓場も見えている。今日は九時からハンマ宅の地鎮祭。昨夜ハンマが松本に思わず洩らした一言。「もうチョットと奇抜なモノになると思っていたんだけど。」安心しなよハンマよ。ハンマの家は決して奇抜ではないけれど世界に飛べるグライダーだから。この家は何故か最初から飛行物体をイメージしていた。伊豆の漁師ハンマの家、ズーと海で暮らしていた男だから、後半の人生は空を飛ばしてやりたいと考えたからだ。ハンマの家に泊ってみれば、天井にデッキカ、プロペラ付のグライダーの模型が吊るしてあって、高校生時代に作ったものらしい。やっぱりそうだろう。ハンマの小粋な皮肉や冗談は自分の中の消そうにも消す事が出来ぬ少年振りをカムフラージュする為の防衛本能から生まれているモノなのだ。多分、山本夏彦も筋金入りにそういうところがある筈だ。目ざわりデザインの連載で山本夏彦のそういうところを書いてみようかとフツと考えた。俺はやっぱり、どうやら人間に関心があり過ぎる。それが建築家としては最大の欠点だろう。しかし人間は面白い。一番面白い。

西伊豆に友人藤井晴正（ハンマ）の家を建てる事になった。森秀己鈴木敏文小林興一と彼等の家を何かしらの形で作ってみたい。二〇〇年程の附合いの俺なりの表現になるだろう。彼等には本当に助けられた。口に出して言えぬ位に助けられた。俺だって失意の底にいる時があつたからね。次は森秀己の家だな。アト残り三人皆逃げ廻りそうだけれど、逃げ切れるものではないのだ。伊豆の少年シリーズでやってみよう。しかし、一人一人皆個性が際立つて異なるところが面白い。それ故にそれぞれ今の時代からは浮くか沈むかしか無いところも面白い。

グライダーのパイロットみたい時代に時代を滑空してやり過ごすし

かないのだ。時代に巻き込まれては駄目だ。しかしあんまり離れてもいけない。滑空してみせるしかないだろう。幻庵は滑空ではなかった。海底に潜った風があったな。深く音もなく時間も止まったマンマだった。ヨシ、ハンマの家は陸と空の際をスレスレに飛ばしてみよう。手投げの小さなグライダーのように。朝安良里港まで散歩。路地をクネクネと曲りくねって、まるで仏壇の中に迷い込んでゆく感じ。九時地鎮祭。松本太田列席。陽射しが流石に強い。地鎮祭後ハンマのアパートに一人閉じ込もって原稿書き。原稿はイヤだけれど、これから逃げたら俺は駄目になるのも知っている。イヤな事はしなければならんのだね全く。

十時書き始める。ハンマ宅のミッキーマウス時計が十時を打った。時が止まり私は別世界にただよい始める。十二時前六枚書く。腹が減った。

十二時半松崎町小邸へ。小林興一のソバ屋である。小林は八ヶ岳の翁高橋の弟子でうまいソバを喰わせてくれるのだが、世田谷村近くの宗柳のソバと比べるとどうか解らないように思う。宗柳はありとあらゆる一品料理が美味で、小林はソバ一本のところ弱味のような気がする。ソバ道なんてしやらくさい。料理の一種にしか過ぎないのだから、もう少し品数を増やすべきであろう。十三時松崎町サンセットヒル着。いつもの下宿部屋で原稿書き。

なんと奇跡的に六時半に原稿二本仕上げてしまつ。is最終稿十枚。室内四・五枚。仕上げた。出来はともかく良く書き上げた。と我ながら思う。やれば出来るじゃないか。こんなところを鈴木に見られたら殺されるぜ。やれば出来るんだが、何故かやる気になれない事も多いのだな。森さんハンマと松崎港近くの名物オバチヤンの民芸茶房で晩飯。オバさんも年を取った。魚を喰べる。二〇時半サンセットヒルへ戻る。今夜はゆっくり眠りたい。松本

は普通な男だが何とかアレでやっていけそうかも知れぬ。人柄が安定している。明日は早朝に東京に発とう。

八月十四日

五時目覚める。昨夜は完全休養で助かった。来夏は世田谷村には冷房をいれる必要があるな、やっぱり。冷暖房ナシは山本夏彦に任せておけば良い。妙なところで意地を張っても仕方がない。ゲーテはやはりミラノの女性を想い続けている。きっぱりとあきらめた自身を少し誇大に認めようとしているところが再び怪しい。ゲーテ程の人でもこんなに単純な虚飾を残したの、ある意味では救いだな。再び諧謔聖人フィリップ・ネリについて触れている。ネリに関しては無い才質を持つこの聖人を余程気にしていたのがわかる。朝食後再び安良里へ。藤井晴正に車で送ってもらって蓮台寺へ。十五時世田谷村帰着。東京は暑苦しい。幾つか連絡事項が世田谷に入っていた。世田谷に仕事場を移したのがようやく知れ始める。社会の反応がまことにゆっくりしているのが知れる。世田谷地下は電話番号がひどく未熟だから、キチンとさせなければならぬ。

八月十五日

朝は少しばかりゆっくりした。今日はお盆だ。世田谷村には仏壇が無いので先祖供養は気持の中でやるしかない。軽井沢の磯崎さんと連絡。土日と軽井沢にうかがわせて頂く事になる。次女友美が世田谷村は煉熱地獄だと磯崎新に訴えたため、救いの手がべられた形になった。

ゲーテはやつとローマを出立しようとしている。

ローマを去りなるとする最後の夜の

悲しき町の姿を心に辿り　　というオヴィディウスの哀歌とやらが最後に記されている。

どうやらゲーテはこの後フィレンツェに出掛けたようであるが、それはイタリア紀行には記されていない。ルネサンス芸術に対するゲーテの考えを知る事はできなかったが、(何故フィレンツェを避けたのかの真の理由は知らない。)全巻を通してゲーテの古典芸術に対する熱情に触れ得た事は収穫であった。

シシリア旅行に端を発して私のゲーテのイタリア紀行の旅は始められた。パレルモのグランドホテルにワーグナーの胸像が麗々しく置かれていた事から、ワイマールへゲーテへと連想が膨らんだ。遅々として歩を進める事の無い読書ではあったが良く中断しなかったと思う。しかし鈴木博之とのシシリアの旅は意外なゲーテ読書を私になさしめた。来週は再び鈴木博之との台湾の旅が待ち受けている。原稿の債務が大部残ってはいるが、図々しくとばかり行いくしかない。久し振りに読書らしい読書をした。読後感らしきものはあるが、間を置いて記したい。

十八時野辺より電話あり。久し振りに会う。元気なようで何よりだ。宗柳で食事。食べ振りも良かった。古い友人が次第に残り少なくなってきた。結局群居の集りでは彼がしぶとく残っている。